

市街地残存農的環境を巡る新たな局面とその背景 その2  
～市街化に伴う地域組織構造と住民意識の変化～正会員 藤本友博 1\* 同 中島熙八朗 2\*  
同 宮里明日香 3\*\* 同 阪本隆一 1\*市街化 農業用水路 地域組織構造  
住民意識変化

1. 研究の背景と目的 前報では、熊本市市街地内における農と関わる様々な住民の動きが明らかになった。それらの動きは、今後、市街地内の農に関わる環境をストックしていく上で、重要な位置づけにあると考えられるが、そういった住民の動きは何故、表面化してきたのか。その背景を明らかにすることが重要であるとする。

そこで本稿では、地域に大きく広がりを見せつつある住民の動きとして、熊本市東部長嶺地区(託麻西、南校区)における藻器堀川(かつての農業用水路)を巡る住民の動きを事例に市街化に伴う藻器堀川の維持管理にみる地域組織構造の変化と現在、藻器堀川の維持管理に関わる活動者の意識および活動の変遷を明らかにする。更に市街地内農業用水路に関わる住民の動きとして、熊本市南部田迎地区での事例を報告し、水路と関わる住民の動きが発現してきた背景を考察することを目的とする。

2. 対象地区の概要 長嶺地区は、1970年の熊本市編入以前までは農村地帯で広大な農地が広がる中、島状に竹林が存在し、地区の中心を東西に藻器堀川が流れていた。しかし、1970年の熊本市編入を機に、当該地区は市街化区域に入り、急激に市街化が進む一方で農業が衰退していく。農地、竹林に関しては、農用地として維持が困難となり主に開発用地として次々と売却、転用され、地区内に部分的に残存している状況である。藻器堀川に関しては、市街化以前、農用、生活用として利用され、良好な環境を保っていたが、市街化に伴い農用、生活用としての利用は消滅。更に団地開発によるコンクリート護岸化や家庭排水流入からその環境は悪化し、都市小河川としての様相を呈している。しかし、近年農用として機能していない残存農地を地域住民が共同耕作するといったことや、藻器堀川の住民保全活動の動きがみられる。

## 3. 藻器堀川の維持管理にみる地域組織構造の変化

藻器堀川と現在最も関わりが見られる長嶺地区託麻南校区2町内の市街化に伴う地域組織構造の変化を図1に示す。熊本市編入以前の には、農業関連組織として、「養蚕組合」、「水利組合」、「農家組合」が存在しており、地域の農業環境はこれらの組織を軸に維持管理されていた。また市街化も進展していなかったことから町内自治

組織においても農との関わりが深く、青年団においては藻器堀川の清掃を手伝っていた。市編入後の の期間においては、農業関連組織の「産業部」が新設されてはいるが、「養蚕組合」の消滅からも分かる通り、市街化によって地区の農業は衰退の一途を辿っている。また、町内自治組織では、構成員も急激に移入者の割合が高くなることで、質的に変化していき、この期間に農業を基盤とした地域組織構造が崩壊していくこととなる。 の期間においては、藻器堀川の急激な環境悪化から、1985年に「藻器堀川をきれいにする会」(以下きれいにする会)が発足。清掃などを行いはじめる。 の期間においては、水田が完全に消滅したことから「水利組合」が解散し、藻器堀川の維持管理に関わる地域組織が消滅することとなる。また、「きれいにする会」の活動も停滞する。以後、藻器堀川は行政管理となるが、実質上放置された状態である。一方で、1992年に「クリーン帯山」、1996年に「ハーブ文庫」が地域保全組織として発足をみせるが、この期間においては個々の活動に止まっている。 の期間においては、市街化も停滞し、「EM散布グループ」をはじめ、様々な組織(表1)が生まれ、それらは「きれいにする会」を軸として繋がり、面的に広がりを見せ、新たな藻器堀川の地域管理システムを形成しつつある。

4. 住民意識の変化と活動の繋がり 前述した藻器堀川の維持管理に関わる組織、中でも活発に活動を展開している代表者の意識および活動の変遷を図2に示す。現在、藻器堀川で月に一度行われているEM散布活動については、M.Yさん、Yさん、Kさんらが個人的に受講したEM散布講習会をきっかけに、同町内に居住する「きれいにする会」会長 S.S.さんを誘い、学習会などの準備活動を経てEM散布活動を開始。その後、藻器堀川の河川改修の話を通じて、ふるさとの重要性を訴える「ハーブ文庫」T.S.さんがEM散布活動に参加。また「きれいにする会」の活動においては S.S.さんの知り合いでもある「保育園」園長 K.S.さんが園を場所として提供、園主催の川祭りでは「きれいにする会」が共催となり盛り上げ、自治会を通じた広報活動から様々な地区の住民が参加している。一方、「託麻西PTA」K.M.さんは、子供の環境教育の必要性を訴え、「ハーブ文庫」

の活動や藻器堀川の行事を広報誌に掲載を行っている。

4. 市街地における水路を巡る住民の動き(熊本市南部田迎地区の事例) 以前、田迎地区は広大な水田を有する農業地帯で 1970 年以降急激に市街化が進んだ地区である。現在、地区の農業は衰退し、市街化の残地として部分的に田畑が存在している。地区を南北に流れる農業用水路・二の井手も以前土地改良区に所属する地区内の農家によって共同作業(草刈りや浚渫作業)が行われていたが、市街化に伴い、多くの農家が土地改良区から脱退し、共同作業は 1980 年以降消滅することとなる。しかし、1997 年に市の提案から校区自治組織「田迎まちづくり委員会」が発足し、初代委員会会長が土地改良区役員であったことをきっかけに、2001 年から地域住民(消防団、婦人会、小学校等)が主体となり二の井手の清掃や水質浄化活動、コイの放流といった活動を展開させており、新たな地域管理システムが形成されつつある。これまで二の井手は現役の農業用水路という性格上、一般の地域住民は主体的に関わることの出来ない状況にあったが、地区内での農業用としての利用が衰退した現在、水辺として活用したいという田迎地区住民の要望が土地改良区の利害と一致することで、一連の活動が実現している。

5. まとめ 長嶺地区における 1970 年以降進む市街化は、農的な空間を急激に変化させると同時に農を基盤とする地域組織構造にも影響を与え、その農的な空間を支えていた地域管理システムを崩壊させた。市街化によって維持管理の担い手を失い、荒廃した状態の藻器堀川に対し、「藻器堀川での子供の頃の思い出」や「市街化による子供の遊び場の消失」等から藻器堀川の残された環境の重要性を認識した住民が個々に保全活動を発起。現在それらが繋がり、意識を共有し、「きれいにする会」を軸に活動が点から面的に広がりつつある。

一方、田迎地区も地域住民と水路の関わりがみられ、特に現在も農用としての使われているという特徴がある。これら水路と関わる住民の動きが表面化してきた背景としては、市街化に伴って農業用水路が農用としての性格を低下、もしくは消滅し、荒廃する一方で地域に水辺を求める様々な住民の都市的要求が生じてきたことによるものと考えられる。それらが現在“まちづくり”、“環境教育”、“地域環境保全”等をキーワードに表面化。町内自治組織や地縁的なネットワークによって繋がり、農に変わる地域管理システムが形成されつつあり、地域環境資産としてストックが図られようとしている。

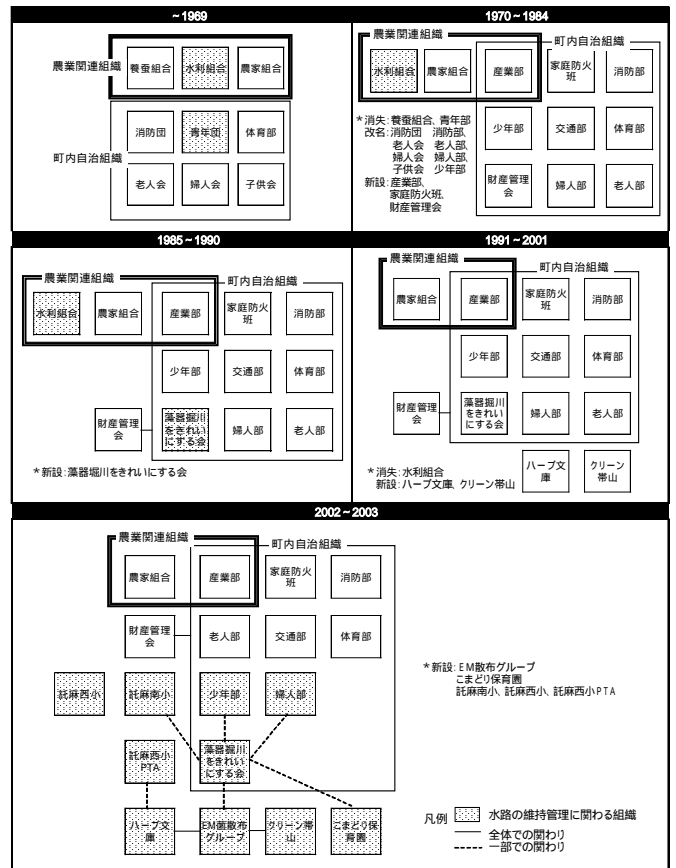


図 1. 地域組織構造の変化  
表 1. 各組織の活動内容

団体名	活動の内容
きれいにする会	藻器堀川流域の町内で構成され、主な活動は年2回の清掃活動、水辺教室である。
EM散布グループ	月一度、町内の住民、学生が10名ほど集まり、清掃やEM菌の散布を行っている。
ハープ文庫	子供や住民が集える場を作りたいという思いから、自宅を開放し子供に本を貸し出し、外遊びを行っている。EM散布グループとも繋がりが生じ、散布活動も参加。
クリーン帯山	婦人ボランティア団体として発足、EM菌に関する出前講演を展開している。
保育園	川祭りなどの行事を「きれいにする会」と共催している。
託麻西小PTA	地域環境を残していきたいという考えのもと、藻器堀川の様子を広報誌に掲載するといった活動を行っている。
託麻西・南小	総合学習の一環として藻器堀川について学習、南小の授業では「きれいにする会」の会長が、ゲストティーチャーとして招かれる。
婦人部	婦人部の住民と「きれいにする会」の会長が伴いEM散布活動を行っている(*EM散布グループメンバーと婦人部のメンバーは重複している)。
少年部	「きれいにする会」の呼びかけで、水辺教室に参加。

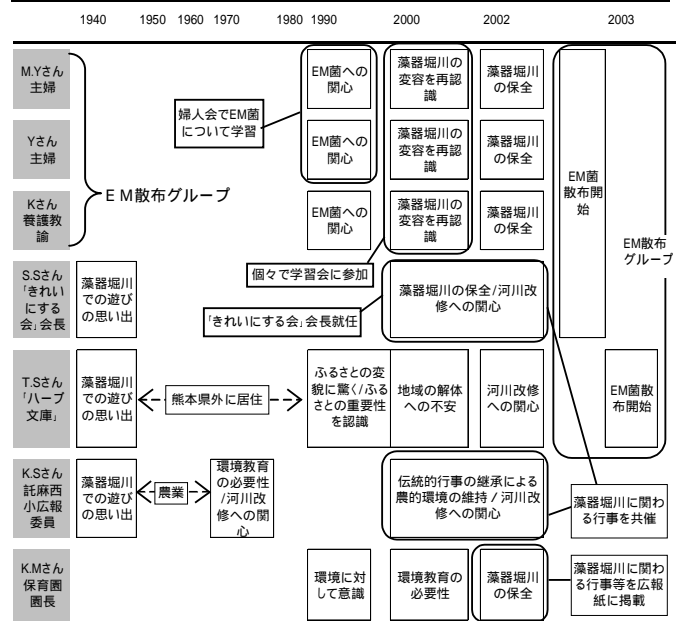


図 2. 活動者の意識及び活動変遷

1\*熊本県立大学 環境共生学研究所 大学院生  
2\*熊本県立大学 環境共生学部 教授・博士(工学)  
3\*熊本県立大学 環境共生学部 助手・修士(工学)

1\*Graduate student, Prefectural Univ of Kumamoto  
2\*Prof, Prefectural Univ of Kumamoto Dr. Eng  
3\*Assis, Prefectural Univ of Kumamoto M. Eng